

月見台のある豪農の館

【内山家】

内山家は、神通川の分流河道が流れる宮尾村新田開拓以来の旧家で、江戸時代は富山藩でも別格扱いの御扶持人十村役を務めた千石地主として、農政に尽くした豪農である。

建物の主要部は、慶應4年(1868)に建てられ、その後、明治20年(1887)から大正末頃までに書院、書院茶室、仏間など、順々に増築・改装され、庭にも手が入れられた。

屋敷は約12,000m²で、正面中央に表門、主屋はほぼ中央に配されて、その右側は回遊式庭園、左側には小屋が連なり、奥には納蔵がある。主屋の脇には井戸屋形や作業小屋、左奥には鳥小屋、背面には長大な土蔵がある。

主屋は、式台(賓客玄関)に近い広間や座敷などの空間と、その右奥の書院や書院茶室などの空間、そして最も奥の台所や食事の間、桜香の間(居間)などの空間に分けられる。また、土蔵横や庭園奥にはそれぞれ茶室があるほか、雁行型に連なる主屋廊下の奥には月見台が建てられている。月見台は回遊式庭園を望む最適な場所に位置しており、邸宅の象徴的存在でもある。書院や書院茶室、木屋、雪隠などの主屋に連なる数寄的な空間として用いられた。

庭園には銘石や灯籠などが配され、主屋の外観と調和して見事な住空間を創出している。



主屋奥の居間側の外観。垂直に立てた小屋束と水平に通した貫が織りなす碁盤目状の構造は、漆喰壁に映えて美しい。主屋裏側の意匠にも豊かな美意識が感じられる。



鳳翽軒





明治に増築された書院や書院茶室などの
空間は、表座敷から雁行してきた畳廊下
で結ばれている。その畳廊下と月見台を
つなぐぬれ縁は、庭園へ誘うアプローチ
になっている。

